

(最優秀おはなしエンジェル賞 幼児・小学生低学年の部)

## わたしのふうせん

小一・深谷 真采

「三がつになりましたね。そろそろ、そつえんしきのれんしゅうがはじまりますよ。」

せんせいにそういわれて、わたしは、いよいよ、ようちえんとおわかれする日がくるんだとおもった。マヤせんせいとあえなくなる。ミナちゃんやミナミちゃんとあそべなくなる。ようちえんのおともだちで、おなじがっこうにいく人は一人もない。がっこうのせんせいはきびしそう。わたしは、とつてもふあんになった。その日のよる、わたしは、おねしよをした。あかちゃんるときしか、したことがなかったのに。じぶんでも、びっくりした。でも、もつとおどろいたことがおきた。その日のあさ、かがみを見ると、わたしのあたまの上に、とうめいでまるいものがうかんでいる。わたしがうごく、そのふうせんみたいなものも、いっしよにうごく。

「なんでこんなところに、ふうせんがうかんでいるのかなあ。」

わたしは、おねえちゃんにきいてみた。

「ふうせんなんて、うかんでないじゃない。きのせいだよ。」

おねえちゃんは、わらっていう。みんなにはみえないらしい。

つぎの日のよるは、おねしよがこわくてねむれなかった。いつもは、おねえちゃんとねているのに、なかなかねむれない。その日から、おかあさんといっしよにねた。とうめいなふうせんは、一日ごとに大きくなっていく。どんどんふくらんでいくふうせんが、こわくなってきた。おかあさんにも、おとうさんにもみえないし、どう

しよう。

わたしは、そのふうせんをわることにきめた。りょうでパチンとはさんでも、なかなかわれない。かさでつついてもわれない。てでつかんで、かべにぶつけてもだめだ。おしりでふみつけても、つねってみても、ぜんぜんわれない。いきをふきかけてあたたためても、みずでひやしてみても、だめだ。ふうせんはふくらみつづけて、とうとうわたしのかおの三つぶんくらいにまでなってしまった。

そして、いよいよ、そつえんしきの日がやってきた。

「そつえん、おめでとう。」

「まこちゃんなら、だいじょうぶ。」

「きつと、うまくいくよ。」

おとうさん、おかあさん、おねえちゃんがいつてくれた。わたしは、ころがほつとして、わたしならできる！とおもえた。そのしゅんかん、あたまの上の大きくふくらんだふうせんが、パチンとわれた。やった！わたしはころのなかでさけんだ。そして、そつえんしきで、わたしは、大きなこえでおへんじをすることができた。

だれにもみえない、わたしのふうせん。ふうせんのなかには、わたしのころのなかのふあんやしんぱいのきもちがつまっている。そして、そのふうせんをわれるのは、わたしだけなのだ。

四がつかからは、一ねんせいになる。きつと、また、ふうせんはできるとおもうけれど、そのふうせんをわつてのりこえながら、わたしらしく大きくなっていきたい。



わたしのふうせん  
深谷真采



Chiaki. 〇

画：岡田千晶

---